二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

小説 狩野　景
挿絵 igul

第一幕　チェーンソー・ハイネ　006
第二幕　ピルグリム・メイデン　053
第三幕　生ける死者たちの女王　100
第四幕　静寂の鋼刃　140
第五幕　守護天使たちの誘惑　190

登場人物紹介

Characters

衞堂 灰音（えどう はいね）

路夢露学園に通う二年生。支離滅裂に暴走する言動で、究極なマイペースのトラブルメーカー。

ジュリエッタ＝アルジェント

路夢露学園の一年生。突如学園にやってきた謎の留学生。修道女の格好をした礼儀正しい少女。

一乗寺 綺亜（いちじょうじ きあ）

路夢露学園の一年生。対人恐怖症で内気なため、クラスでは殆ど目立たない女の子。

風内 流智緒（かざうち るちお）

路夢露学園の三年生。生徒全員が敬愛する学園の生徒会長。愛くるしいルックスとは裏腹に、知的で優秀な才女。

狭霧 冬馬（さぎり とうま）

本作の主人公。路夢露学園の一年生。穏やかな性格で争いごとが苦手な冴えない少年。

『第一章　チェーンソー・ハイネ』より

にこれ以上関わり合いになりたくない。
それなのにはち切れそうな爆乳が悩ましく揺れる腰の括れたしなやかな痩身に誘惑され、冬馬の肉体は健康的な男子そのものの正直な反応を示してしまっていた。
圧迫的な疼きと共に股間の肉棒が膨張していた。ズボンを隆起させるその硬く強張った膨らみが、ツインテール少女のミニスカートの上から柔らかな下腹に押し当たり、ギュッとめり込んだ。途端に長い口づけを愉しみながらしおらしく閉じていた灰音の目が、にょんっ、と勢いよく開き、にへらと、勝ち誇ったような色を湛えて不敵に笑む。
しまった、という焦りが冬馬の胸に湧き起こる。
その途端、ちゅぽん、と唾液の糸を引いて唐突に接吻が中断された。
「あは、アタシのべろちゅー、気持ちよかったのね？　分かるよ、ハイネもすごく夢中になって、股間、濡れちゃったデス……。と、冬馬の、ここも、すごく、硬くなった……」
「――ぬ、濡れ……て……。あう……」
一瞬、嫌悪感を忘れ呆然としてしまった。奇妙で怪しげとはいえ、爆乳の美少女にそんな告知をされて平然としていられる男などいない。思わず彼女のスカートに目線を落とし、ぐびりと喉を鳴らしてしまう。
「あ……やん……!!　えっち、濡れたあそこ、見たいんだ……？」
途端に、灰音はその眼差しに撃たれ恥じらったかのようにキュッと内股に細脚を摺り合わせる。その仕草にますます勃起がいきり立ち、堪らず前のめりになりそうになった。

「でも、その前に……とーまの、見せるのだぁ!!」
だがその足下にいきなり糸の切れた操り人形のように、灰音の痩身がへたり込んだ。
（えっ!? あ、な、なに……？）
互いに汗ばんでしっかり握りしめた両手から少女の指が離れ、屈み気味に立ち尽くす彼の股間へと向かいファスナーを断りもなしに引き下ろす。
「――!! ふ、うわぁッ！」
途端に肥大した肉棒が、ぶりゅんと勢いよく弾け出てしまった。
（嘘ッ！ そ、そんなっ、僕の……がっ!! なに考えてんだ、この娘っ！ お、女の子のくせに、こ……こんなこと、するなんてっ!!）
少女めいた童顔に似合わず太い部類に入る赤銅色に充血した竿幹は、適度に節くれ立って急角度に反り返り、傘のように張り出た雁から鏃（やじり）のように先細った先端を天に突き上げて小刻みに脈打っている。
（あう……み、見てるっ！ こんな近くでっ!! くっ、は、恥ずかしい……っ！）
食い入るような視線に顔が熱く火照ってしまう。逃げ出したいのだが、下手に動くとすぐ側まで寄せられた少女の顔にペニスが触れてしまいそうで怖くて動けない。
「あは……、冬馬のおちんちん！ ちんちん、て、こんな、なってんだ……？ ど、どうしよ、すごい、臭い、変な、イイ匂いする……。美味しそう、すぎて……も、もう……」
じゅるじゅると涎を啜りながら喘ぐ声が悩ましい。

（なに……する、つもりなんだよっ⁉　なんで、こんな……ことっ！　や、やだっ‼）
興奮に荒くなる熱い吐息が、火照った亀頭に吹きつけられて狂ってしまいそうだ。
「やめ……て、そんな、恥ずかし……い……からっ！」
犬のお座りから腰を浮かせた姿勢で、まじまじと凝視するツインテール娘の視線に耐えかね弱音を吐く。だが少年の懇願は彼女の耳に入っていなかった。
「ふぁ……む……。んん……」
唾液を溢れさせる唇が尖った犬歯を覗かせいっぱいに開かれた。
「ふぁ……はぁああっ！　あふっ、は、はぁあっ‼　はぁ、はぁあ、あはぁあ……」
漏れ出る吐息のリズムが次第に速度を増し、弾む息音を昂らせる。真っ白な彼女の肌が見る見るうちに上気し、蜂蜜のようにねっとりした甘い体臭を漂わせた。
（——‼　ふぁああっ！　ま、まさかっ⁉　そんなことっ！　こんな娘にっ‼　い、いやだっ！　や、やめ……っ‼　ふぁっ、はぁ、あ、あぁあああああぁあぁっ！）
不吉な予感に背筋が総毛立った。行きずりの得体の知れない奇妙な女の子に、こんなことされるなんてまっぴらだ。不安と嫌悪感に胸を掻き乱されるというのに、肉勃起は近寄りつつある熱い唇の気配に打ち震えて、鈴口から歓喜の涙を溢れさせていた。
「はぁ、あは……あぁ……ふぁ、と、とーまの、ちん、ちん……ふぁあぁ……はむ、はぁむ、ん……‼」
生暖かい溜め息を鼻からも噴き零して灰音が興奮の極みに陶然と漂っていた。

亀頭がその荒い吐息に晒されてこそばゆくて堪らない。
汗ばんだ身体から立ちのぼる甘く淫靡な香りに鼻孔が誘惑されるなか、湿った熱い息遣いの中に陰茎が先端からすっぽりと包み込まれる。
「んぐ……んむぅうっ！　ふぁ、はぁあああっ!!」
大胆にぱくんと、躊躇いのない思い切りのよさで、灰音の口が冬馬の極太を咥え込む。
ぬちゅっ！　むじゅじゅっ!!　にちゅっ！
「――くふっ!!　はわぁっ！　ハ、ハイ……ネッ!!　や……めっ！　ふあぁぁっ!!」
脱力の熱い衝撃が尾てい骨を駆け抜けて、腰が抜けそうになった。
「ふぁあはっ！　ふぉーむぁの、ひんひん……はわぁあ!!　太ひ、いっふぁい、顎ぉ、はぶえひゃいふぉ……。んぐ……あむ……ぅ、ふぱっ、ふぁはわぁ……っ！」
（く……ぁああっ！　うそっ!!　く、口で、あんなところをっ！　汚い、のにっ!!　この娘っ、どうかしてるよっ！　ああ、で、でも……でも、なんで、気持ち……イィ……）
男の性器を平然と口に頬張れる少女の神経が理解できない。それなのに落ち着かぬ快感が脚を震えさせる。
「こんな……ことっ、やめ……ろっ!!　ふぁあああぁっ！」
股間がむず痒く疼いて、熱い唾液に満たされた口腔の心地よさに浸りきってしまう。
その疼く勃起肉へと灰音の舌がねっとりと絡みつき、興味津々にしゃぶりつく。
「んふっ！　ぬむ……くふぁ……あぶっ!!　むぷぁ……ふぁわ……ハァ……」

――ねぷっ！　ぐくちゅっ!!　ちゅぺっ！　ぬちゅちゃっ!!　ちゅく、ちゅぷっ！
雁溝を何度も窄めた先に穿られ息が詰まってしまう。裏筋をざらりとした舌の表面で拭うように舐められ、亀頭全体を転がされると足の裏から熱い痺れが湧き上がって尻の奥まで熱せられ、括約筋が反応して肛門が引き締まる。
「はうっ!!　あ、くあはっ！　だ、め、そんな、変、な……舐める、なっ!!　んうっ！」
口では拒んでみせるが気持ちよくて堪らない。少し乱暴で丁寧さに欠けるが、気紛れそうで得体の知れない彼女らしく、次の刺激の予想がつかなくて頭が真っ白に染められた。
「ふぁあ、変ぁふぉこ？　あは……ふぉーむぁの変なふぉこ、おいひぃ……はぁわっ!!」
肉竿を包むたっぷりの唾液が攪拌され、くちゅ、ぺちゅ、と淫靡な響きが奏でられるその間にも、窄めた唇で根元を圧迫しながら口蓋と舌で肉太を挟み絞るように扱いてくる。
――じゅぶっ！　ちゅぐっ!!　じゅぺぺ、ぐちゃるっ！　じゅずずっ!!　んぐぶっ！
「くふうっ！　んううはぁあっ!!」
堪らずつけ根の奥が脈打ってカウパーの露が、とぷんと多めに尿道から溢れてしまう。
「ぬふぁ……ん、んぐ……はぁ……男の……子れも、き、きもひいいと、ぬれる……んらね……。あはぁ、冬馬の、おちゅつ、おいひい、ちんちん、汁ぅ……」
――ぐびびっ！　んぐぅっ!!　ぐびっ！
口内へ漏らされたその歓喜液を飲み下し、灰音が満足そうに声を上擦らせる。
「ひゃ、ひゃいねも……おまふぁべひょべひょ、気持ひィィ……。んくっ！　ふぁ……」

『第三章　生ける死者たちの女王』より

ながらそろそろと捲り上げた。
「――!!　流智緒……せんぱ……い……っ!!」
「ッ――と、冬馬が、エッチなもの飲ませるから……ボ、ボクまで、こんなに、な、なっちゃったんだよっ！　これを、慰めて……もらわなくちゃ、こ、困っちゃう……」
胸元から覗くブラジャーと揃いの大人びた黒いレースのショーツが、内側から滲み出た悩ましい雫にべっとりと濡れていた。
薄い布地に張りついて透ける真っ白な下腹が鮮烈に目に焼きつく。
（ぼ、僕の、精液飲んで……あんなに、ぬ、濡れて……!?）
痩せた腿の内側にまで垂れ落ちている無色透明の愛液に言葉を失い見入っていると、流智緒の小さな手がおもむろに面積が少ない下着の縁に指を掛けた。摘み上げられていたスカートがふさりと滑り落ちてさらけ出されていた股間を隠してしまうが、もぞもぞと尻をくねらせ下がってゆく手の動きに奏でられる湿った衣擦れが少年の耳を惹きつける。
（あ……せんぱい……パンツ、脱いで……）
ぐびりと喉が音を立ててしまう。膝まで脱ぎ下ろされ、クシャクシャに丸まってスカートの裾から姿を現した布地に見入る冬馬へと、流智緒が更に躙り寄る。
「冬馬……は、ボクのもの……だぞ……。――んっ……くぅっ!!　ふ、ふぁあっ！」
股間の真上まで来ると、流智緒は彼の腹に手を着いて腰を沈めてきた。ますますいきり立ち、精液をぶちまけた尿口から止めどなくカウパーを先走らせていた剛直へと熱く綻ん

だ薄花弁がまとわりつき、思わず腰を突き上げてしまいそうな心地よさに囚われる。
「はうぁあっ！　流智緒……せんぱひぃっ!!」
熱く蕩けた割れ目から溢れ出すたっぷりの蜜がカウパーと入り交じって蠱惑のぬめりを増幅する。密着した粘膜が不規則に脈打ち、咥えかけた亀頭を奥へと誘う。
「……さあ、ボク、の膣内、へ、き、きて……。あぐうっ！」
腰を下ろしてくる彼女の動作に窮屈な膣穴が極太の切っ先でこじ開けられて、肉幹を締めつけながらも内側へと男根をめり込ませる。
「る、るちお、せんぱいっ！　ふぁあ、は、入っちゃい、ますっ!!　はわっあああっ！」
「ふぁああ、はくぅうううんっ!!」
憧れの存在への挿入に冬馬が躊躇する。もどかしげに、流智緒は自分から腰を迫り出して一息に極太の男根を膣内へ迎え入れた。
――ぬぶっ！　ずぶずぶずぶっ!!　ぐじゅずずずっ！
「はわぁあああっ！　せ、せんぱ……いいっ!!　あふぁあああっ!!」
薄膜の抵抗が弾け分泌汁の潤滑に任せて勃起肉が奥へとめり込んだ。戦慄く流智緒の背筋に追従して、狭膣の襞壁が瞬発的に痙攣し竿肌を扱く。その不意の快感に喘ぎを震わせ、冬馬は憧れの生徒会長の膣深くへと男根を挿入できた喜びに浮き立った。
「ふ……はぁ……あ、と、冬馬の、……が、は、挿入ってる……ッ！　あ、す、すごい、根元まで、ボ、ボクの、膣内、にぃ……ん、くふぅうぅ――っ!!」

流智緒もまた、膣にまるまると下級生の男根を咥え込んだ感激に背筋を脈動させる。
「ボクの中、冬馬の、で、い、いっぱいで、変になりそう……っ！」
キツキツにペニスが収まった股間をドレスの上から両手で押さえ、内から膨れ上がる悦楽に戸惑って息をはーはーと呻くように吐く。
「ボクが、冬馬を食べるはず、なのにぃ、と、冬馬に、中から、た、食べられ、ちゃう……。ふわっ‼　ん、ぁあ、太いの、膣内で、ひくひく、動いて……」
感極まって湧き出た涙で潤んだ瞳を真っ直ぐに少年へと注ぎながら、股穴を埋める極太の疼きに腰をくねらせる。
「も、もうっ、だめに……なるっ！」
下腹に密着した尻がもじもじと落ち着かず、柔らかな房球を押しつけてきていた。
（流智緒、せんぱいの……あそこが、僕の……。く……ふぁ、キツくてすごく締めつけて……くるっ！　あふぅ、そ、それに、ずっと痙攣しちゃってる……から……ッ‼）
それだけでも堪らないのに、生徒会長の膣は絶え間なく襞を脈打たせひっきりなしに勃起竿を絞り上げるように揺さぶってくる。
「も、もう……っ！　だめ、ですっ‼　我慢できな……っ！　る、流智緒、先輩ッ‼」
夢のような快楽の前に理性が崩れる。細く括れた腰を両手で抱え込むと、冬馬は羽のように軽い彼女をしゃがませたままで、下から激しく突き上げるストロークを繰り出した。
「んふぁはぁあぁ――――っ‼　つ、強いっ！　激しすぎ――ッ‼　もう、少し、優し

く……かふぁ、はぁあぁ――――っ！」

ガツンと子宮を容赦なく弾き上げられる衝撃によろめき、無我夢中の少年をなだめようとするが、いきり立った彼の暴発は収まらない。狂おしげに収縮を強める狭膣を刮げて抽送を速める極太に灼熱の快感を突き込まれ、童顔娘の喉から嬌声が絞り出される。

ずぼっ！　ぬぶぼっ!!　ぐじゅっ！　ぶちゅっ、ぶちゅるっ!!　ぬずぶぷぷぶっ！

膣内で擦れ合う襞と竿肌の摩擦を和らげようと、しとどに溢れ出た愛液が隠微な音色を高々と響かせる。奥へ突き込むと分け広げられる襞が鬼頭を擦り上げて焼けるような快感をもたらし、抜き出そうとすると収縮する壁が逃すまいといわんばかりにきつく締めつけてきた。それに加え、膣内の浅い部分で早々と陰茎が突き当たる子宮が乱暴なピストンに弾かれ、腹腔内部を鞠のように弾んで亀頭へと跳ね返ってくる。

「あぁあああぁっ！　お腹、駄目になっちゃうっ!!　くふぁああっ！　冬馬の、気持ち、よすぎふぁあああああはぁああぁ――――っ!!」

「締めつけっ放しですっ!!　せんぱいの、膣内ぁっ！」

捲れ上がるスカートの中、めり込む男根に押し出されて膣口から噴き出した愛液に濡れ、びっしょりとなった尻が黄桃のような房を波打たせる。激しく跳ね暴れる陰茎に下半身を突き上げられながら、流智緒の上体がぐったりと少年の胸へと俯せ、紐タイを緩めた胸元から黒い下着が覗く小振りな乳房が密着した。

「も、もうっ！　るちお……と、呼び捨て……って、いってるのにっ!!　お、怒るぞ、と

う……ま、くふぁあっ！　はうぅうっ‼　はぁあぁあっ！　んぁはぁ――――――ッ‼」
ヴァギナを脈打たせながら可愛らしく拗ねた顔で叱られて、甘酸っぱい感動が冬馬の中で弾けた。切迫的な衝動が疼き続ける肉棒へと急速に込み上げてくる。
「でもっ！　だ、だって……せんぱい、なのに……ッ‼　ああっ、気持ちいい、ですっ！　僕、もう……ふぁ、はわぁああ、る、るち、お……‼　はうぅうううぅっ！」
昂る感情に任せて、彼女の望む通り名前を呼び捨てる。
「――‼　あぁ……やっと、冬馬……！　う、嬉しいっ‼」
途端に、膣を貫かれたまま小さな身体を精一杯に伸ばして流智緒が唇を重ねてきた。頬を撫でる銀の巻き髪のくすぐったさに綻んだ口中へと舌が這い入り、冬馬の舌に絡みつく。唾液の混ざり合う官能的な口づけ。
「んふぁああ、冬馬ぁ、流智緒のおま〇こ、気持ちイイッ？　は、あぁあ……ッ！　るちおの膣内で、イキたいよねっ⁉」
名を呼ばれた喜びに少年への熱情が沸きたち、流智緒が歯止めを失った。自分から腰を悩ましくくねらせ、より深くまで極太の肉竿をヴァギナへと誘い冬馬を煽り立てる。
「おま〇こ……なんて、先輩が……ああっ、でも、――く、ぁああ、気持ちイイっ！　流智緒の、膣内ぁあっ‼　こんな、絡んで、流智緒のおま〇こ、ちんぽに、はわぁあっ！」
「はぅ、ああはぁっ！　とうまぁ、気持ち、イイなら、るちおの、おま〇こでイキたい、って、いいなさいっ‼　流智緒のおま〇こに、どぴゅどぴゅっ、て白い、熱いの、いっぱ

い射精したいって、お、おま〇こ――ッ！　るちおの、おま〇こっ、ふぁああぁっ!!」
淫猥な言葉をあられもなく叫び、興奮のあまり感極まって全身を痙攣させる。
「ふぁああ、流智緒！　るちおのおま〇こ、よすぎるぅうっ!!　くぁあふぁあっ！」
幼げな容姿で淫らに狂う生徒会長に意識が浮き上がるようなときめきを覚え、肉竿が脈打って一段と膨張し、女陰がキュンキュンと入り口から奥底まで過剰に収縮する。
「くふぁああっ！　だめ、出ちゃ……出るぅうはぁああうっ!!」
尿道を駆け上る熱濁に華奢な少女を強く抱きしめて、冬馬の全身が激しく震える。
――ぶぴゅるぶぅうううっっ！　どびゅうっ!!　どびゃどびゃどぷぷっ！　ぷじゅっ、ぷじゅっ!!　ぶべべばばばぁああっ！　ぶじゅっ!!　どぶどぶどぶどぶぶぅっ！
「ふあっ、はぁああああぁっ！　ひぁあ、いっぱい、あ、たっぷりぃ、膣内ぁ、出て……ふぁああああっ！　な、なにか……く、くるっ!!　くる……っ！　ふぁ、これ……、だ、だめっ、んくぁはぁああぁ――――ッ！　はわぁああぁ――――ッ!!」
昂る歓喜に子宮が戦慄く。少年にしがみついた小さな身体が切なく捩れて痙攣した。
――びゅぶっ！　ぷっしゅぁああっ!!　ぷじゃっ！　ぴしゅぴしゅびじゅぅうううっ!!　ぶしゃぁああっ！　べちゃっ!!　ぷしゅぷしゅぷしゅぷしゅぷしぃ――――っ！
一度目からさほど時間も経っていないというのに、夥しい量の煮えたぎったスペルマが膣内に遠慮なくぶちまけられた。その灼熱の圧倒的な直撃に子宮を晒された流智緒も、お返しとばかりに絶頂の蜜を噴き零す。強く抱きしめ合いながら、冬馬と流智緒は達してな

お深々と繋がった性器の隙間から収まり切らぬ液汁をボトボトと溢れさせていた。
果実が発酵したような甘ったるい香りが濃厚に立ちこめる。
汗と、互いの陰部から溢れ出た恥ずかしい汁に濡れて衣服も髪の毛もベトベトになっている。それなのに不快感など欠片もなく、ただ快楽だけが心を満たしていた。
「流智緒……せんぱ……んぐっ！」
渦を巻く銀髪を顔にまとわりつかせ朦朧とした表情でうっとりと荒い息を繰り返し、少年の薄い胸板へと頬を擦り寄せてくる生徒会長へ声を掛けると、艶めかしい口づけに塞がれてしまう。火照った吐息を注がれる興奮に鼓動を早くして驚くと、堪らなく可憐な拗ねた表情が睨めつけてくる。
「やっと呼び捨てにしてくれたのに、また先輩っていうの？　そんな冬馬は嫌いだゾ……」
「うぐ……だ、だって、そんな……」
堪らず息を飲み、赤らむ頬で照れながら悩み、覚悟を決める。
「る……流智緒……」
恐る恐る彼女の名を呼び捨てで呼ぶと、ぷいと頬を膨らませていた幼げな顔が満足げに破顔した。心地よさが名残惜しいのか、ペニスを膣に挿入させたままで手を伸ばし冬馬の髪を撫でる。そして、一切の人間らしい感情が欠如した冷たい眼差しで告げた。
「あぁ……とても気持ちよかったゾ。冬馬は、満足してくれたかな……？　――――さて、これで、お楽しみはお終い。そろそろキミを喰らわせていただくよ、冬馬……」

『第五章　守護天使たちの誘惑』より

濡れショーツに皺を寄らせて蠢き、ぬちゅ、くちゃ……と呟きを漏らす修道女の淫花をまじまじと見つめてしまう。

（あんなに……濡れちゃって、ほ……欲しがって、るん、だよね……？）

早鐘を打つ鼓動に頭へと血が昇ってまともな思考ができなくなる。

捩れる陰唇の奥に開いた肉穴の感触を思い出し、勃起竿が痛いほどに張り詰めた。

乾いた喉に唾液を飲み込むと、ぐびりと大きな音が鳴り響いてしまう。

「ジュリエッタ……ッ!!　僕っ、もうっ！　はぁ、ああぅっ!!」

興奮に先走った喘ぎを震わせて、綺亜のヴァギナを指で掻き乱しながら少年はもう片方の手で三つ編みの紅髪がほつれかけた少女の下着に掴まる。

「はわっあっ!!　と、冬馬さまっ!?」

ねちゅ、と染み出た愛液が指先をぬめらせた。ジュリエッタが啜り込んだ精液の雫に唇を白く汚し顔だけを振り向かせる。大きく見開いた榛色の瞳に驚きが浮かぶなか、冬馬は大胆に、掴んだショーツを脱がし下ろす。

「ふわぁあっ！　あ、あああぁ……っ!!　と、冬馬さまぁあっ、我が君っ！」

ストッキングを止めるガーターを腰に残したまま、ぷるんと白い二つの柔房が弾け出て波打ち揺れた。濡れ布越しに淫靡な姿を晒していた女裂が、ねっとりとした蜜汁の糸を引き生々しく綻んで花弁を蠢かせる。

その中心へと狙いを定め、膝立ちで躙り寄ると、歓喜に昂りながらもジュリエッタの声

が困惑を表す。

「あぁあ、どうしましょう……。神聖な、愛の交わりを、う、後ろ……からだなんて、汚らわしいのです。まるで獣なのです……神が、お許しになりません……。あぁ、でも……」

正常位以外の体位への背徳感を抱きながらも、興味津々の様子で拒もうとしない。

「僕、もう、我慢できないっ、からっ！　い、いいよね？　ジュリエッタッ‼」

急激に蜜の量を増して内腿をべちょべちょに濡らす股ぐらから目が離せない。

「は、はぃいっ！　後ろ、から……し、仕方ありませんっ‼　お挿入れ下さいませぇっ！」

口ぶりとは裏腹に誘うように揺れるジュリエッタの尻肉を片手で掴むと、冬馬は粘膜襞を潤ませる牝器目がけて勃起の切っ先を無我夢中で突き込もうとした。

挿入の期待に打ち震え修道女の表情がだらしなく緩み微笑む。その刹那、

「とーまぁ、ほらぁ、お、おっぱい……だぞっ‼」

精液の味わいに朦朧と横たわっていたツインテール少女がふらふらと起き上がり、袖が赤白ストライプに彩られた黒いカットソーを思い切りよくたくし上げた。

「えっ？　う、うわぁっ！」

水蜜桃のように完熟した柔らかな爆乳が下着を纏わぬ姿で、ばるるぅんっ！　と弾け出て汗を飛び散らせる。水風船のように膨らみ僅かな振動にも敏感に応じて左右の房を互い違いに激しく揺れ弾む。蕩けそうに柔らかながら重みで垂れ下がることなく張り詰め、直径の小さな桃色の乳輪に薄紅の乳首を粒勃たせる。

「せーしのお返しだよっ！　いっぱい吸っちゃえっ!!」
その雪のように白いたわわな乳房を両手で抱え、ゆさゆさと撓ませて見せつけながら、灰音はもつれる足で歩み寄ると冬馬の顔を両房の谷間に挟み込むように押しつけてきた。
「ぐぶぅうっ！　かふぁあっ!!　ぶぁ、ぶぁいねっ！」
蒸したての肉まんを顔に押しつけられたような熱さと息苦しさに呻きが漏れた。汗ばんだたわわな乳房は衣服の上から手で触るのとは比べものにならないほどきめ細かで、ムッチリと肌にへばりついてくる。汗の匂いと乳臭いような香りが入り交じった体臭が鼻孔を満たし、波打つ房肉に溺れる心地よさが脳裏を呆けさせるなか、乳房ごと身を預けてくる金髪ツインテール娘の勢いに身体がよろめく。
（ふぁあう、お、おっぱいっ!?　は、灰音の……っ！　ジュリエッタ、に、挿入る、のにっ!!　こんな、ふわふわなの……気持ちよすぎ、ちゃうっ！）
「ふぁあっ！　そこ……っ!!　そこ、もっと……あぁあっ！　いいっ!!」
指先に膣内のひときわ気持ちいい部位を刺激され、短い黒髪の少女までもが痩身を戦慄かせしがみついてくる。
ジュリエッタの膣にあと僅かまで迫った極太の狙いが上側に逸れ、たわわな尻房の谷間で流れ込んできた愛液に湿ってひくついていた鳶色の菊皺へと突き当たってしまった。
「んひゃぁ、ふぁあぁっ!?」
ぬぶっ、と亀頭の先が潤んだ穴にめり込み、尼僧の身体が強張る。ぱふぽふと熱帯びた

爆房に、目隠しされながら顔面を弄ばれて朦朧となった頭では状況が理解できない。
「くぁああ、だ、だめ……で、すぅ、そ、そそ、そ、こ……ちが……ん、あぁっ！　と、とうま、さまぁ？　おし、りぃ、そこ、おし……あ、あぁ、あ……んきひぃっ!!」
ヴァギナよりあからさまに狭く抵抗のある感触だというのに、興奮に任せて腰を迫り出してしまう。必死に括約筋を引き締めるジュリエッタだが、冬馬の肉槍は窄められた皺穴を無理矢理に押し広げ押し入ろうとする。
（ジュ、ジュリエッタの、この前、より……キツくてっ！　気持ち……ぃいっ！）
――ぬちぃいっ!!
「ひあぁあっ！　だめぇっ、そこっ、き、汚……いっ!!　んきひぃいっ！」
引き絞る括約筋が菊皺を狭く窄め、強情に極太の侵入に抵抗を示す。
「だめっ、なのですうっ！　太いの、膣にィ、挿入れなくてはぁああっ!!　あうっ！　こんなの……ッ!!　罪深……ッ、ふぁあわああっ！　あうっ、はぁううっ!!」
――ぬじゅっ！　ぎゅずずっ!!　ぶずびっ！
雁首まで埋まりかけた亀頭が押し出され、ひくついて蠢く肛門に先端を甘噛みされてしまう。
「くぅ――ッ！　あはぁあっ!!　ふぉんなの、……ふぁれはらっ！　意地悪ひないれ、は、早く挿入はへ……へっ！　はううっ!!」
焦らされるもどかしさにますます情欲が昂ってしまう。収縮を強めた肉穴の中で締めつ

けられる快感を想像して居ても立ってもいられなくなった。
「――あう……っ！　冬馬さまぁ、それほどに、わたくしのお尻の穴を……!?」
懇願する少年の望みを叶えてあげたくなる。
「我が君が望むのでしたら、気持ちよくさせて……。ああ、でも、このような神の教えに背く、淫らな行為っ、やはり、わたくしっ！」
だが修道女としての戒律をどうしても破れない。陰茎の先端をアナルについばんだまま、ぐちゅぐちゅとぬめる音を奏でて尼僧が困惑に尻房を捏ね蠢かす。
「ふぁああっ！　ジュリエッふぁっ!!　僕も、気持ひ、いいっ！」
その勿体ぶった刺激に煽られ冬馬がいきり立った。
強引に腰を迫り出し、頑なな肉門へと剛直を無理矢理に突き入れる。
――むぢぢぃっ!!　ぎちゅぎゅちっ！　じゅずっ!!　ぎゅるっ！　ずぶずずぶずうっ!!
「ッ――ぁああひぁああっ！　そん、な、ご無体……なぁあっ!!　神の教えッ、背くぅうっ！　罪深ぁあっ!!　だ、だめっ、だめだめっ!!　あぐぅうう――――っ！」
願いも虚しく、はち切れそうに勃起した肉怒張はミシミシと軋む音を腸液にぬめらせて窄まろうとする穴の中へとめり込んでいく。
直腸で炸裂する異質感に、精液の染みたシーツへ顔を擦りつけながら修道女が悲鳴を上げ、神へと詫びるように十字架を両手で握りしめる。
「ふぁあああうっ！　あ、くぁ、ああ、ふぁっ!!　んっ、んうぁあはっ！　――く……

ぁああ、挿入って、しまいましたぁ……。イケナイ、ところに、ふぁ、ああぁ……」
嘆くように、しかし震える声の裏側に解放されたような喜びを滲ませながら、修道女が深い溜め息を漏らす。
「――え、えぇっ!!　お、おひ、り……っ!?　あ、ああっ!!」
その言葉に冬馬はようやく、自分がペニスを突き入れた肉穴がどこなのかを悟った。
（お、お尻、に……挿入れちゃった！　だ、だって、灰音が、おっぱい、押しつけてくる、から……。おま○こだと、思ったのに……。ここ、って、ちんこ入るんだ……!!）
排泄の穴から早く抜き出して、生殖の穴に挿入れ直さなければと思うのだが、内臓の太い襞が勢いよく収縮して締めつけてくる快感に行動できなくなってしまう。
（違う穴、だけど、大丈夫だよ……ね？　こういうのが好きな人もいるって、いうし……。そ、それに、こっちなら、妊娠とか、大丈夫だしっ！）
膨れ上がる興味に胸が高鳴り、唇に触れた灰音の乳首をついばんで舌先で舐め転がしてしまう。
「ふぁ、と、とーまぁっ！　おっぱい、もっとちゅーちゅーしろっ!!」
彼女にねだられるままに鼻先で谷間を掻き分けながら、たわわな房肉にむしゃぶりつき、窄めた舌で強張った乳首を中心に捏ね遊ぶ。
「――んっ！　はわっ!!　ひぁああっ！」
途端に爆乳少女が弱々しい喘ぎを漏らし、顔面に乳房を押し当てたままで冬馬の頭部を

両手で抱きしめてきた。
「ふぁ、あ……んっ！　狭霧、くんの指……、そこ、だめぇっ！　よすぎ、ちゃう……ッ!!　ふぁああ、な、なにか、きちゃ……うっ！　んぁ、はぅっ!!」
傍らでは綺亜が恥骨の裏側を膣内から圧迫される歓喜に身悶えて、昂りゆく胎内の波に不安と期待の入り交じった表情で悩ましい嬌声を途切れ途切れに張り上げていた。
「し……仕方ない、のですぅ……。冬馬さまが、求めるの、ですから……。ふぁあ、排泄の、ですのにぃ……。でも、こんな、生殖以外の目的で、男女が交わるなど、罪深い……」
直腸へとキツキツに収まった肉太の切迫感に背筋を震えさせながら、ジュリエッタは罪の意識と冬馬への愛情の狭間で心を悩ませていた。
「ああ、でもお尻にペニス、挿入るなどと……。快楽のための性交は、罪、で……。ふぁ……あ、こんな、気持ちよくなる、など……許され、ません。そ、そう、気持ち……イイ」
考えが揺らぐたびにキュンキュンと腸襞が締まり、怒張竿を圧迫してくる。
「くふ……ぁあっ！　ジュリエッタ……っ!!　ゴメンッ！　でも、すごく、イイからっ!!　ギュッと、強く締めつけて……きてっ！　ふぁあ、お尻、すごいぃっ!!」
「――ですぅ……不浄な、中、挿入れられて、どうしてこんな、気持ちイイん、ですかぁっ!?　と、冬馬さまぁあっ！　これ、気持ちいいですうっ!!　はひぃイイィイッ！」
禁忌の思いが余計にジュリエッタの悩ましい疼きを増幅させる。
冬馬の喜ぶ声が、次第に彼女をアナルの快楽へと屈服させてしまった。

「う、うんっ！　僕も、きもひいい、からぁあっ!!」
爆乳少女の肉房にむしゃぶりつきながら、両手でジュリエッタの腰を引き寄せて抉り込むようなストロークを繰り出す。
「や、やあっ、やぁああっ!!　だめっ、だめだめだめぁはぁああ――っ！　強いぃっ!!　強すぎますっ！　ああっ、奥ッ!!　不浄、なのにぃいいっ！　イケナイのに、イイッ!!　おぅううっ、気持ちイイのダメ、ですのに、こっち、すごいですうっ！」
尼僧服を着崩す均整の取れた肢体が波打って悶えた。刺激を受けぬよう堪えているのだが虚しく下半身がくねり、尻肉を拉げて叩きつけられる抽送を過剰に味わってしまっている。胸元の編み紐がほどけ白いブラウスごとはだけた修道服からは、たわわな乳房が釣り鐘型に溢れ出て、清楚なブラジャーをずりさげながらベッドの上で激しく弾む。
――ずじゅっ！　ぬぶんっ!!　ぐっぢっ！　ずぶしゅっ!!　ぎゅずっ！　ごじゅっ!!
榛色の大きな瞳が溢れんばかりの涙で潤み、朗らかな笑みを絶やさぬ表情が切なげに顰められる。ジュリエッタを激感に追いつめながらも、冬馬の興奮はますます昂り、ストロークの速度を増し続けた。
（こ、こんな……気持ちイイ、なんてっ！）
亀頭のエラが勢いよく襞を刮げて出入りするたびに、直腸が強張って絡みついてきた。もどかしい抵抗感に節くれ立った幹竿が絞られ、敏感な裏筋を盛大に擦られる。
「くぉうう！　こんなっ!!　か、神がお許しに……っ！　だめ、ですぅっ!!　んふぅっ！

く、はふっ、くっ、くぅうあっ!!　いっぱい、すぎ、ます、ふんぁあっ！」
許し難い行為を窘めようとするジュリエッタの声も、根元まで埋め込む深い突き込みでS状結腸を乱打されるうちに、快楽の喘ぎが入り交じり悩ましく上擦り始めた。
「はうっ！　そんな、締めつけふぁらっ!!」
分泌を増した腸液とカウパーが入り交じって、窮屈だった挿入に潤滑をもたらす。
「ほ、本当は、ダメぇ、なんですからっ！　今回、だけですっ!!　今回、だけですからね……ッ！　あうっ、うっくっ、はわぁんっ!!　気持ちイイッ！」
いい訳がましいことを叫びながら、ジュリエッタの尻は粘った汁を菊皺の隙間から飛び散らせ、冬馬の極太を直腸の奥まで咥え込もうと忙しなく突き上がる。
ぎちゅるっ!!　ずびゅぬぶっ！　ぶじゅるずっ!!　ぱずんっ！　ねぶんっ!!
敏感な肉同士の擦れ合いに滑りが加わり、むず痒さを伴った快感が膨れ上がる。
（あうっ！　キツい、のにっ!!　こんな、ぬるぬる……してっ!!　あふううっ！）
灰音の爆房を舐めしゃぶりながらピストンを勢いづかせる股間に、切迫的な放出欲が押し寄せる。我慢することなく冬馬は、欲望の命じるままに怒張を繰り出しながら、唇を割ってめり込んでくる柔乳に歯を立てて食らいつき、少し強めに甘噛みした。
「ひゃはんっ！　んひぁあっ!!　と、とまぁはあっ！　んあううっ!!」
感電したようにツインテール娘の全身が硬直し、顔だけがだらしなく呆ける。チェック柄のスカートの内側から、びゅぶっ！　と愛液の飛沫を滴らせ爆乳の痩身がへたり込む。

指を二本咥え込んで絶え間なく痙攣しながらぬめり汁を溢れさせる綺亜のヴァギナの、恥丘の裏側にある喜悦のポイントを指先で抉るように刺激してしまう。

「――あわっ！　んんん……っ!!　こ、こ、こ、こ……こ、これ……すごい、んぃいっ！　こん――――なっ!!　い、いいい、いくぅうっ！　おほぁあぁあ――っ!!」

唐突に指がへし折れるかと思うほどに襞壁が引き絞られて、膣奥から煮えたぎった濁汁がびゅぶぶぶぶっ！　と噴き出してきた。綺亜の痩身が激しく波打って悶え崩れる。

「おぁはあっ!!　んぬぁああぁぅっ！」

柔らかく暖かな乳房が顔から離れてゆくのを惜しみながら、少年は尿道へと押し寄せた熱流を存分に解き放った。

――びぶぶぶぶっ！　ずびゅるるっ!!　ぶじゅっ！　どびゅっ、どぶどぼどぼぉっ!!

極太に埋め尽くされた狭い直腸内に大量の白濁がぶちまけられ、奥壁に跳ね返って襞へと染み込んでゆく。

「ひぁあっ！　出てるっ!!　と、冬馬さまの、子種ぇっ！　お、奥、当たってますっ!!　きひぃ、熱ッ、勢い、強いぃっ!!　ふぁあ、これぇ、ああ、だめですっ！　主よっ、き、気持ちいいですううっ!!　あ、ああ、あ、い、イクッ！　いっちゃいますっ!!　お尻で、ふぁああぁっ!!　とうま、さまぁあっ！　っ!!　はぁうぁああぁ――――っ！」

ぷじゅっ！　べじゅばぁあっ!!　ぶじゃぶじゃぶじゃっ！　べじゅばぁあ――――っ!!

偽りようのない歓喜に打ち震え、ロザリオを手に十字を切って、極太の埋まった尻を迫

り上げた。皺を伸ばされ拡張された菊穴にずっぽり刺さった陰茎との狭間から腸内に収まりきらないスペルマが溶岩のように溢れて滴り落ちる。

その白濁に濡れながらアナルを羨むように脈打って開いた膣穴からも、ごぷ、ごぷっ、とたっぷりの愛液が湧き出て精液と混ざり合う。

「ふ……ぁああ……ジュリ、エッタぁ……」

「とう、ま、さまぁ……ふぁああっ！」

バックで繋がり合った姿勢で彫像のように束の間硬直し、絶頂の波が頂点を越えるに連れてへなへなと崩れゆく。汗と脱力的な淫臭を立ちのぼらせ、尻を迫り上げたままぐったりと突っ伏す修道女から、ペニスが抜け出てぶるんと身震いが起きる。

呼吸を荒く乱しながら少年は仰向けに倒れ込み、白く濁った液汁を垂れ流してひくひくと痙攣し続ける尼僧の肛門をぼんやり眺めていた。その傍らでは、冬馬の歯形がうっすらとついた乳房をたぷたぷと両手で弄ぶ灰音がうっとりと涎を垂らして喘ぎ、綺亜が大量の絶頂汁を緩んだ花弁の狭間からしどけなく漏らし痙攣を続けている。

（あぁ……後ろの、穴、開きっ放しになっちゃって……。それに僕の、が、まだ溢れてきちゃって……。こ、こっちで、しちゃったんだ……ジュリエッタと……）

他ならぬ敬虔な修道女と普通ではないセックスをしてしまったことに、背徳的な興奮が湧き上がった。射精直後だというのに、勃起は収まるどころかますます充血を増して元気よく脈打ちを繰り返す。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/